

前田村開拓 130 年によせて

「北の農士たち」

前田村を開いた人々に捧げる

3/3

2012.03

花 木 幹 史

前田神社



前田神社由緒記

祭神 天照大神 前田利家

由 緒

明治拾六年舊金澤藩主前田利嗣侯より
士族授産の為金拾萬圓を拝受して、これを
資金に起業社を設立し西田三郎氏を
管理人として百五拾萬坪の地積を拂
下げ約三萬圓を費して、事務所や、
移民小屋数拾棟を建て明治拾七年
から三回に亘つて七拾九戸を移住させ二年間
農具や食料を供給して農事に勤ませり為
明治拾九年加賀の尾山神社の御分霊を
奉じて前田神社と號したのであります。
其の後大正九年拾月岩崎部落にありし
神社風害の為祭神天照大神を奉迎し
合祀せり。

創立 明治二拾年六月拾一日

祭典 例祭九月五日

神 殿 本 殿 拜 殿

境内 三 千 坪

経武館の碑

明治十六年起業社の先達は 旧藩主前田利嗣侯より士族授産のための資金拾万円を拝受して北の地に入る 爾後三回に亘る七十九戸の移住者は 固き誓いの下に未開の大地に挑み 時には猛熊と闘い 目的に邁進すると共に青少年の育成に心を注ぐ 就中 明治十九年青年の修練のため剣道場を建設し 武神摩利支天を祀り 経武館と称す 爾来多くの剣士を輩出し 永く青年団活動に裨益すること極めて大きく 且地域発展の中心的使命を果たした 経武館は昭和廿九年九月 十五号台風で倒壊し その面影を見ることあたわざるにより 茲に先人の偉業を偲び 開基百年に当たり 碑を建てその名を後世に伝える

昭和五十七年五月二十五日建立

前田神社 氏子一同
共和町長 駒場剛太郎書



経武館の碑

経武館とは

藩立の学校が加賀藩にできたのは寛政 4(1792)年 11代藩主治脩(はるなが)が創設した藩校である。

明倫堂と経武館といった。

文を教えるのが明倫堂、武を教えるのが経武館であった。最初に校舎が建てられたのは兼六園内の梅林周辺である。

経武館では武芸全般にわたって教授し、明治元年(1868)に洋学の壮猶館と合併した。

世話人

雨夜 一信

井田 良一

内山 和之

岡田 茂雄

川本 正男

熊木 常男

斉藤 幸生

高沢由次郎

高松 重雄

疋田 武

藤田 勝雄

安田 順一

篤志寄付者

西田 保次

石 工

安田 正満

前田神社は明治 20 年 6 月金沢尾山神社の分霊を奉遷し建立された。境内には開拓の歴史を記念する碑が三基ある。

その一基は経武館の碑で、あとの二基は、前田開拓の恩人である旧藩主子孫前田利建氏の書になる開基の碑で、裏面には八十周年記念、昭和 38 年 5 月 26 日建立金沢市尾山神社宮司 樋木勢岐書とある。

そしてもう一基は、町内唯一の貴重な句碑である。句碑の表面にはまだはっきりと次の句が刻まれている。

「神の庭 笹かり了へて 見る穂波」潮波とある。金沢藩は加賀の千代女で有名な俳句の盛んなところで、句は武士のたしなみであった。起業社に鋤をおろした武士の末裔たちは、開拓の苦闘の中で謡曲をうたい、俳句を詠み、経武館では剣道の業を磨き、士気を鼓舞したことであろう。

備考、潮波なる人物は雨夜一基氏であり、一基氏は前田開拓の功労者雨夜一秀氏の甥にあたる。

平成 4 年 3 月

共和町観光協会



前田神社の記念碑



雨夜一基氏の句碑

前田神社の境内及び付近



今でも起業社名がのこっています



神社参道脇の石柱



前田神社の鳥居



前田神社本殿より参道側を望む

交通事情

明治 38 年、石炭の集積地であり、また、水産の町でもあった岩内に於いて、岩内～小沢間の岩内馬車鉄道が開通した。

馬車鉄道の前は、小規模な船舶による輸送であった。

明治 37 年に函館～小樽間（現 JR 函館本線）が開通しており、岩内の茅沼炭鉱（後志管内泊村）から採掘された石炭の輸送をするために建設された。

大正元年に開業する国鉄（日本国有鉄道）岩内線建設への布石となった。

馬車鉄道のルートは前田－発足－幌似－小沢に停留所を設け、岩内市内には支線を設けた。

大正元(1912)年に岩内軽便線として開業した。区間は岩内～小沢間（14.9 km）であった。

大正 11 年(1922)年国鉄岩内線に改称され、昭和 60 年 7 月 1 日廃止となるまで、営々と地域交通の便として活躍した。

2 級村成立

明治 39(1906)年 4 月前田村と発足村に「北海道 2 級町村制」が施行されることになり、6 つの村は大きく再編された。前田村は老古美村、梨野舞納村の 2 村を合併、堀株川西側も編入し、2 級町村前田村となった。また、発足村は幌似村の堀株川東側を編入し 2 級町村発足村となった。さらに同 42(1909)年 4 月には小沢村も「北海道 2 級町村制」が施行され、ここに共和町のもととなった旧 3 村が成立する。

北海道前田村の昔

「日本海こんぶロード 北前船」(読売新聞北陸支社)という書籍がある。

巻頭言で作家の津本陽氏は「北前船の存在なくして北海道の開拓は難しかっただろう。また、運搬された物資で各藩が潤い、明治維新へと動く経済的パワーとなったであろう」と書かれています。

そのなかで、「子孫が語り継ぐ北海道前田村の昔」という項目に目がとまった。

『メロン畑や水田が続く北海道南西部の高和町。1994年夏、石川県から交流に訪れた少年団リーダー研修生 25 人に、講師役の井田良一さん(78才)は、「私は金沢の加賀藩士から数えて四代目。祖父に聞いた話をしましょう』と語りかけた。井田さんが住む同町前田地区(旧前田村)は、明治17(1884)年の元加賀藩士 79 戸の移住に始まる。

明治維新後、生活に窮した元藩士の救済事業として、加賀前田家 15 代利嗣が資金を出した起業社の開拓村だ、

入植者たちは野獣や熊の出没する原始林に掘立小屋を建て、開墾に明け暮れた。剣道場や、金沢の尾山神社から分霊した前田神社を、村の一角に建て、困難の中でも百万石の武士の誇りは忘れなかった。

真剣に耳を傾けた金沢東高校 3 年、山田千秋さん(18才)たちはその夜、前田地区の子孫の家に民泊し、金沢の街並みや、暮らしを紹介、実の家族のように触れ合いを深めた。

(1996年取材当時の年齢)

前田地区の方との懇談

平成 21 年 7 月中旬、以前から訪れてみたいと思っていた前田地区に来ることが出来た。

国道 5 号線を小沢で右折し、国道 276 号線(尻別国道)を西進する。これが市史に出てくる余市山道なのだろうか、共和町役場を過ぎ、しばらくすると前田と書かれた標識が道路際に現れた。目的の前田神社が分からないまま岩内港まで来てしまった。旧加賀藩士達が北海道移住の第一歩を記した場所である。

再び来た道に戻ると、前田と書かれた標識が現れた。前田地区はここから先ほどの標識までの場所となると、かなり広い場所である。前田神社は道路の南側にあるので、注意して走行すると、細い道の奥に神社が見えた。しばらく進むと「前田神社」と書かれた石柱が参道脇に建てられている。ここからが神社の参道なのだろう。国道から神社までは 300m 位あるだろうか、参道からでも 200m 位はある。

山道手前の家に 1 人の方が庭の手入れをされているので、話を伺ってみることにした。

黒田さんという方で、この神社は前田神社である。起業社が入植して開墾した場所である。

何年か前に金沢市からホームステイで学生が来たことがあるとのこと。昔、神社の祭りでは岩内から香具師が大勢来て、国道の両脇に店を出して、たいそうな賑わいであったが、近年ではめっきりさみしくなってしまったと話された。

前田神社の境内は森閑としている。神社の周りは小さな木立がうっそうと繁茂している。その奥は大きな木立が続いている。北海道特有な原生林なのだろうか。境内には、手水場の上に「前田神社由緒記」がある。本殿は一般的な村社で、さほど大きくはなかった。少し横に社務所があるが、勿論人はいない。前田神社の記念碑と句碑がある。経武館の碑もある。経武館は金沢にあったはず、この地にも同様な呼び名の館があるのには親近感すら覚えた。

翌年、起業社のことが気になりパソコンで色々検索していると、金沢市議会議員の中西利雄氏のホームページが目にとまった。(2004年10月の作成)

「私は、一昨年、縁あって一通の手紙をいただきました。それは、今から数百年前の明治33年(1900年)、凶作のため、ふるさと金沢に別れを告げ、新天地を求め、遠い未知の地・北海道へ開拓移住された関係者の方からでした。

開拓当時の両親の筆舌に尽くしがたい苦勞とふるさとへの帰郷が果たせないまま亡くなったお父さんのことについてなどが書かれてありました。

常々、私は、北海道の開拓移住地を訪れ、関係者の方々とお話をしたいと思っておりましたが、この夏、地元・二塚地区の有志の方々と一緒に訪れることができました。

初日は旧二塚村からの入植関係者が多く住んでいるニセコ町で移住者の二世、三世の方々と懇談をし、二日目には、石川県人が入植してできた旧前田村、現在の共和町の山本栄二町長を表敬訪問し、山出市長からの親書、記念品を手渡してきました。三日間という大変短い日程でしたが、金沢出身の先人の方々が、開拓移住し、今日の北海道繁栄の礎を築いたことを誇りに思うとともに、継続的な交流ができればとの思いを深くいたしました。

九月の本会議では、歴史と文化の薫りが色濃く残るまち金沢だからこそ、ふるさと偉人館で紹介されている木村栄などの偉大な先人の業績だけでなく、こうした名もなき先人の貴重な歴史も大切にしていきたいとの思いから、北海道開拓にその生涯と情熱を捧げられた先人の貴重な歴史を何らかの形で後世に伝えていく必要があるのではないか、民間交流を都市間交流にまで高めることができないかということをも市長に質問しました。市長は、北海道開拓については平成17年発刊予定の「金沢市史 通史編3近代」の中で取り扱う予定であること、都市間交流については、前田家江戸下屋敷のあった東京都板橋区、前田家支藩があった群馬県富岡市との交流例も参考に、民間交流の動向も見ながら研究してみたいと答弁されました。期待をしたいと思ひますし、両地区の継続的な交流にこれからも努力していきたいと思ひます。」

1年前前田神社を確認したが、もう少し当時を知りたいとの思いにかられ2度目の北海道旅行を計画した。

そして、中西氏を訪ね前田神社総代の石動利明氏を紹介して頂くことができた。

平成22年7月、前田地区を再び訪ね、神社社務所でお会いすることが出来た。

その時、今井正信氏、黒田作治氏も同席され、黒田氏のお宅に場を変えての懇談となった。

明治16年(1883)起業社として入植して2012年が130年となるので、何か記念となることをと考えている。まず記念誌を発行したいと考えているが、入植者の名前が分からない。

雨夜一秀氏の末裔の方は、高齢で管理できないとのことで、今までの資料を頂いたのだが名簿という茶封筒はあるが、中の名簿は入っていないなかったとのことであった。

小生も金沢で探してみることを約束した。

昨年、前田神社に行ったときに参道手前で庭仕事をされていた黒田さんに聞いた、「子供達のホームステイは何故やめてしまったのか？」と疑問になり聞くと、「何故、中止したかは不明だが、金沢からは7回(7年)程、夏休みに2泊3日に来ていた。」とのことでした。

黒田さんのお宅にもホームステイしたそうで、夕方、役場に迎えに行き、2人が一晩泊まって翌朝、役場に送っていったそうである。そのときのエピソードで、茹でたトウモロコシを1本生徒に渡したら、「僕の家では切った、小さな物しか食べたことがない」と感激していたそうで、医者の子息さんだったとのことでした。

金沢へのホームステイは一度も無く、今度は金沢へと思ったら中止になっていたと残念がっていた。

また、ホームステイの時期は7月末で、農作業の繁忙期でもあり、人の世話が大変だったと心情を吐露される場面もあったが、できればお互いの土地ことを知る良い機会で、続けていったほうが良かったのにと話された。

「内地の方が、我前田のことを調べていることを心強く思うので今後とも情報交換していきたい。」と話され、今後、情報交換しましょうということで前田地区を後にした。

歴史を調べて

北海道の各地で開拓時の歴史、特にご先祖様の調査があるそうですが、当別町は伊達藩が戊辰戦争で敗れ、東北の地から北海道石狩の地へ転地したことから、当別町が創設されたとあります。当別町には伊達記念館があり、開拓当時の出来事がイラスト画とともに展示してありました。また、「当別歴史講座」として町民の方の歴史についての関心も高いと感じられました。

前田村の資料に関しては、前田育徳会の資料が大半で、起業社の方が事務方で移住者が社員の立場であったため、その当時の出来事に関しては一般の方としては記録の入手が出来なかったのではなかろうかと推測します

今度北海道に行けたら、道立図書館で送籍書を確認できればと思っています。

北海道旧前田村移住者名簿

17年度の移住者名簿（土族のみ移住） 赤字は氏名の違いを示す

	金沢市史	新共和町史	家族	送籍証による	年齢	男	女	計
1	板野 忠太郎	板野 忠太郎	3人	板野 忠太郎	41歳	2人	1人	3人
2	小村 駒平	小村 駒平	7人	小村 駒平	42歳	2人	1人	3人
3	長田 員英	長内 員英	3人	長内 員英	39歳	2人	1人	3人
4	大村 亥太郎	大村 亥太郎	4人	大村 亥太郎	27歳	2人	2人	4人
5	笠松 理新	笠松 理新	4人	笠松 理新	37歳	1人	3人	4人
6	矢口 小次郎	屋口 小太郎	6人	屋口 小太郎	36歳	4人	2人	6人
7	高柳 又吉	高柳 又吉	5人	高柳 又吉	38才	3人	2人	5人
8	山田 正直	山田 正直	4人	山田 正直	37歳	3人	5人	8人
9	浅野 次郎	浅野 次郎	6人	浅野 次郎	47歳	2人	4人	6人
10	田島 喜作	田島 喜作	4人	田島 喜作	29歳	1人	3人	4人
11	石田 左太男	石田 左太男	5人	石田 左太男	45歳	3人	2人	5人
12	柴野 栄次郎	柴野 栄次郎	6人	柴野 栄次郎	39歳	3人	3人	6人
13	高山 多三郎	高山 多三郎	7人	高山 多三郎	18歳	4人	3人	7人
14	太田 重行	太田 重行	8人	太田 重行	38才	3人	5人	8人
15	高柳 伊平	高柳 伊平	4人	高柳 伊平	43歳	2人	2人	4人
16	毛利 武信	毛利 武信	9人	毛利 武信	22歳	3人	6人	9人
17	武田 米太郎	武田 米太郎	8人	武田 米太郎	17歳	4人	4人	8人
18	熊木 直次郎	熊木 直次郎	5人	熊木 直次郎	44歳	4人	1人	5人
19	林 有一	林 有一	5人	林 有一	24歳	3人	2人	5人
20	田川 法光	田川 法光	5人	田川 法光	39歳	4人	1人	5人
21	吉村 一治	吉竹 一治	3人	吉竹 一治	59歳	1人	2人	3人
22	佃 久太	佃 久太	6人	佃 久太	61歳	3人	2人	5人
23	堀越 左	堀越 左	4人	堀越 左	39歳	3人	1人	4人
24	北村 武知	北村 武知	5人	北村 武知	44歳	4人	1人	5人
25	雨夜 一雄	雨夜 一雄	5人	雨夜 一雄	57歳	3人	2人	5人
26	西田 有信	西田 有信	9人	西田 有信	43歳	5人	4人	9人
27	浅野 武成	浅野 武成	4人	浅野 武成	44歳	2人	2人	4人
28	伊藤 保道	伊藤 保	4人					
29		石浦 虎次郎	1人					
30		大迫 善之助	4人					
31		西田 三郎	5人					
	17年 合計		158			76人	67人	143

明治 18 年移住者名簿（黄色は自費移住者）

	金沢市史	新共和町史	家族	送籍証による	年齢	男	女	計
1	小川 義忠	小川 義忠	5 人	小川 義忠	36 歳	4 人	1 人	5 人
2	野崎 則直	野崎 則直	9 人	野崎 則直	47 歳	3 人	6 人	9 人
3	水野 銀次	水野 銀治	5 人	水野 銀治	31 歳	2 人	3 人	5 人
4	神保 正表	神保 正義	6 人	神保 正義	33 歳	3 人	3 人	3 人
5	浅岡 仁三郎	浅岡 仁三郎	8 人	浅岡 仁三郎	26 歳	2 人	6 人	8 人
6	下田 仁三郎	下田 仁三郎	4 人	下田 仁三郎	26 歳	2 人	2 人	4 人
7	浅森 与八	浅森 与八	5 人	浅森 与八	40 歳	3 人	2 人	5 人
8	中野 スゝ	中野 スミ	2 人	中野 スミ	20 歳		2 人	2 人
9		児玉 善三郎	3 人	児玉 善三郎	21 歳	2 人	1 人	3 人
	18 年 合計		47 人			21 人	26 人	47 人
			196			97 人	93 人	190

・明治 18 年 12 月の起業社月次月報での移住者数の相違

戸 数 ・ 人 口								
種 別	族 籍	戸 数	人 口 (月次月報)			送籍証による		
			総 人 員	内 訳		内 訳		
17 年移住者	士族	28 戸	152 人	男	80 人	27 戸	143 人	76 人
				女	72 人			67 人
18 年移住者	士族	4 戸	25 人	男	12 人	4 戸	23 人	10 人
				女	13 人			13 人
	自費移住者	4 戸	19 人	男	7 人	5 戸	24 人	11 人
				女	12 人			13 人
合 計		36 戸	196 人	男	99 人	36 戸	190 人	97 人
				女	97 人			93 人

明治 19 年の入植者は無しであった。

明治 20 年、安田守正は家族 5 人とともに入植。その時、金沢から 6 戸の家族も一緒に移民しているが、総人数は不明である。

新共和町史により 17 年は 31 戸、18 年は 9 戸、20 年は 7 戸。（記録として明確な者のみ）合計は 47 戸の入植であったとされている。

送籍証による名簿

原田英二氏の調査した北海道立図書館所蔵の「移住民戸口明細書」、「自費移住民届書」による送籍書を記述して置く。

以下、送籍証の生年月日で、慶応以前の年号の者については理解を容易にするように、入植時の年齢を附記した。

札幌 岩内郡役所御中	石川県金沢区 某区	区長 氏名 印	儀右何某儀 候二付、当区除籍候間入籍方取計有之度依テ送籍書如斯候也	生	長女 氏名	生	長男 氏名	生	妻 氏名	生	戸主の氏名	石川県金沢区(町名番地) 士族(平民)	送籍証
				年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日	年 月 日			

石川県金沢区天神町 2 丁目 58 番地

士族 田島 喜作 (29才)

安政元年 10月 15日生

妻 は 満

明治 2年 4月 1日生

母 以 へ (54才)

文政 12年 7月 15日生

妹 は る (21才)

文久 3年 1月 25日生

同県同区 折達町

士族 長内 員英 (39才)

弘化 2年 3月 生

同県同区 浅野町 36 番地

士族 高 柳 又 吉 (38 才)
弘化 3 年 3 月 2 日生
妻 フ ク (38 才)
弘化 3 年 3 月 15 日生
長男 治吉郎 (17 才)
慶応 3 年 3 月 10 日生
二男 治 作
明治 10 年 4 月 10 日生
長女 タ メ
明治 15 年 12 月 8 日生

同県同区 袋町 56 番地

士族 石 田 左 太 男 (45 才)
天保 9 年 10 月 1 日生
妻 寿 ヲ (28 才)
安政 2 年 11 月 22 日生
長男 新 太 郎
明治 9 年 7 月 1 日生
次男 作 男
明治 13 年 1 月 10 日生
長女 志 ゆ ん
生年月日 不 祥

同県同区 安江町 104 番地ノ 2

士族 屋 口 小 次 郎 (36 才)
弘化 4 年 12 月 25 日生
妻 は る (29 才)
安政 2 年 5 月 1 日生
長男 小 太 郎
明治 7 年 1 月 20 日生
二女 薦
明治 9 年 6 月 3 日生
二男 辰 三 郎
明治 13 年 9 月 6 日生
三男 吉 次 郎

明治 16 年 11 月 1 日生

同県同区 本新保 4 番町 27 番地

士族 小 村 駒 平 (42 才)

天保 13 年 3 月 3 日生

養父隠居 鉄 三 (36 才)

嘉永元年 2 月 10 日生

妻 ひ ろ (36 才)

明治 7 年 11 月 10 日生

同県同区 壱番町

士族 笠 松 理 新 (37 才)

弘化 3 年 12 月 27 日生

母 マ ツ (67 才)

文化 13 年 11 月 27 日生

長女 フ サ

明治 11 年 4 月 30 日生

妹 シ ス (41 才)

天保 14 年 2 月 8 日生

同県同区 伝馬町 15 番地

士族 山 田 正 直 (37 才)

弘化 4 年 3 月 15 日生

妻 は つ (31 才)

嘉永 5 年 8 月 7 日生

養嗣子 健太郎

明治元年 10 月 17 日生

同 な を

嘉永元年 3 月 5 日生

長女 は 満

明治 3 年 1 月 10 日生

長男 松太郎

同 5 年 7 月 15 日生

次女 鶴

同 8 年 9 月 16 日生

諸江屋五兵衛次女

諸 田 ち よ (48才)

天保 7年 11月 15日生

同県同区 備中町 72 番地

士族 太 田 重 行 (33歳)

嘉永 3年 12月 14日生

祖母 定 (55才)

文政 12年 2月 1日生

父隠居 清 三 (53才)

天保 2年 1月 25日生

母 登 江 (46才)

天保 9年 3月 17日生

後妻 ナ ヲ (27才)

安政 4年 3月 24日生

長女 ト キ

明治 11年 3月 21日生

弟 辰 正

同 13年 3月 19日生

妹 箴 重

明治 8年 7月 23日生

同県同区 泉町 58 番地

士族 高 山 多 三 郎

明治元年 2月 5日生

父隠居 多 四 朗 (49才)

天保 5年 9月 9日生

母 ト ミ (35才)

嘉永 2年 5月 3日生

弟 良 吉

明治 3年 9月 6日生

弟 作 太 郎

同 9年 8月 3日生

妹 ツ 子

同 6年 2月 21日生

妹 幸

同 14年 5月 5日生

同県同区 春日町貳丁目 43 番地

士族 田 川 法 光 (39才)

弘化 2年 1月 12日生

妻 ヒ ナ (27才)

安政 4年 3月 16日生

長男 常 吉

明治 9年 1月 16日生

次男 為 吉

同 14年 7月 28日生

三男 友 吉

同 17年 2月 19日生

同区同県 河岸町

士族 大 村 亥 六 郎 (27才)

安政 3年 10月 16日生

妻 美 子 (22才)

文久 元年 9月 5日生

長男 修 一

明治 13年 10月 20日生

長女 志 恵

同 16年 4月 14日生

同県石川郡長坂新町

士族 坂 野 忠 太 郎 (41才)

天保 14年 3月 15日生

妻 与 き (31才)

嘉永 6年 2月 12日生

長男 敬 之 助

明治元年 10月 20日生

同県金沢区荒町 3 丁目 21 番地

士族 林 有 一 (24才)

安政 6年 7月 18日生

父隠居 新 三 (57才)

母 文政 9年 11月 9日生
喜 さ (49才)
天保 5年 9月 25日生
弟 捨 吉 (16才)
慶応 3年 12月 29日生
妹 と み
明治 5年 1月 1日生

同県同区 藺田町 14番地

士族 雨 夜 一 雄 (57才)
文政 9年 12月 25日生
後妻 鈴 (34才)
嘉永 3年 9月 6日生
長男 一 秀
安政 3年 12月 24日生
二男 金 二 郎
明治 2年 1月 23日生
実母 ウ タ (72才)
文化 8年 7月 23日生

同県同区 長町 7番丁 21番地

士族 毛 利 武 信 (22才)
文久 2年 2月 3日生
祖母 ル イ (71才)
文化 10年 4月 15日生
父隠居 武 行 (50才)
天保 5年 3月 4日生
母 ス カ (38才)
弘化 2年 9月 4日生
妹 ハ ナ ヨ (16才)
慶応 3年 11月 27日生
弟 敦
明治 4年 12月 3日生
妹 ト ミ
明治 8年 3月 20日生
妹 ト ヨ
同 14年 4月 22日生

妹 ス ミ
同 17年 4月 26日生

同県同区 長町4番丁22番地

士族 武 田 米 太 郎
明治 2年 4月 6日生
祖母 ア ヤ (70才)
文化 11年 4月 2日生
父隠居 義 重 (42才)
天保 12年 6月 29日生
母 ヨ シ (37才)
弘化 3年 9月 5日生
弟 喜 三 治
明治 6年 1月 22日生
弟 鍬 美
同 8年 1月 23日生
妹 申 子
同 13年 12月 8日生
妹 乙 蘭
同 15年 3月 8日生

同県同区 馬場2番丁46番地

士族 熊 木 直 次 郎 (44才)
天保 10年 11月 28日生
妻 ツ ヨ (41才)
天保 14年 2月 10日生
養子嗣子 栄 次 郎
明治 元年 9月 26日生
田 川 吉 太 郎 (18才)
慶応 2年 2月 3日生
田 川 八 右 衛 門 (77才)
文化 4年 3月 3日生

同県石川郡更川和服町

士族 佃 久 太 (61才)
文政 5年 8月 3日生
妻 富 達 野 (56才)

文政 11 年 3 月 25 日生
長男 久 平 (32 才)
嘉永 4 年 9 月 15 日生
三男 久 次
明治 2 年 4 月 3 日生
登 め
同 5 年 2 月 23 日生

同県同区 水車町 181 番地

士族 高 柳 伊 平 (43 才)
天保 12 年 3 月 6 日生
妻 イ ロ (51 才)
天保 4 年 12 月 25 日生
長男 伊 三 郎 (17 才)
慶応 2 年 11 月 8 日生
長女 ヤ ス
明治 4 年 2 月 24 日生

同県同区 瓢箪町 14 番地

士族 浅 野 次 郎 (47 才)
天保 8 年 3 月 15 日生
妻 リ セ (35 才)
嘉永元年 12 月 10 日生
長女 は つ
明治 7 年 2 月 14 日生
三女 と ら
同 11 年 2 月 9 日生
長男 他 一 郎
同 13 年 3 月 23 日生
母 い そ (74 才)
文化 7 年 5 月 10 日生

同県同区 長町五番町 1 番地

士族 堀 越 左 (39 才)
弘化元年 9 月 3 日生
次男 又 次 郎

同 13年 4月 7日生
 四男 房 四 郎
 同 16年 1月 8日生

笠松理新は、この冬帰郷した際に、タミと結婚し翌年夫婦として帰道した。
 笠松タミは産婆を開業し、小林駒平も医院を開業して、神保明とともに医療に
 当たったという。

(図説石川県の歴史)

翌明治 18年 (1885) 4月は、7戸 33人が入植している。さらに 7月には水野銀治、
 9月には野崎則直が入植している。
 18年の移住者の記録は、道立文書館の「明治 18年自費移民届綴」(文書番号 9403)
 「明治 18年自費移民調」(文書番号 9410)によった。

石川県金沢区浅野町 116 番地

小 川 義 忠 (36才)
 嘉永 2年 4月 20日生
 妻 ス ス (27才)
 安政 4年 5月 25日生
 長男 幸 太 郎
 明治 5年 6月 6日生
 二男 憲 次
 同 11年 1月 6日生
 三男 武 喜 知
 同 16年 7月 3日生

同県河北郡浅野村イ八二番地

浅 森 与 八
 明治 7年 4月 22日生
 父隠居 徳 次 郎 (40才)
 弘化 2年 11月 2日生
 母 ハ ツ
 文政 9年 3月 11日生

妹 ツ キ
明治 11 年 2 月 4 日生
弟 久 兵 衛
同 16 年 3 月 13 日生

同県金沢区此花町 2 番地

士族 児 玉 善 三 郎 (21 才)
元治元年 2 月 4 日生
母 ュ キ (45 才)
天保 11 年 6 月 17 日生
弟 銚 吾
明治 7 年 10 月 30 日生

同県河北郡浅野村口 172 番地

下 田 仁 三 郎 (26 才)
安政 6 年 7 月 1 日生
母 テ リ (52 才)
天保 2 年 11 月 15 日生
弟 小 三 郎
明治 5 年 5 月 27 日生
妹 ス テ
同 2 年 8 月 18 日生

同県金沢区高道新町 36 番地

中 野 ス ミ (20 才)
慶応 2 年 12 月 9 日生
養母 ツ タ (66 才)
文政 2 年 5 月 18 日生

同県河北郡浅野村イ 142 番地

浅 岡 任 三 郎 (26 才)
安政 6 年 1 月 4 日生
祖母 イ ヨ (78 才)
文化 4 年 12 月 29 日生
母 キ ク (47 才)
天保 9 年 9 月 15 日生

妹 ハ ツ
 明治 4 年 9 月 12 日生
 妹 コ ン
 明治 6 年 2 月 18 日生
 弟 由 太 郎
 同 11 年 6 月 22 日生
 妻 キ ク (20 才)
 元治元年 11 月 29 日生
 長女 ヒ サ
 明治 17 年 10 月 25 日生

同県金沢区上百々女町 35 番地

士族 神 保 正 表 (33 才)
 嘉永 5 年 1 月 6 日生
 妻 フ サ (26 才)
 安政 6 年 8 月 14 日生
 母 ヒ サ (72 才)
 文化 10 年 3 月 7 日生
 長男 正 太 郎
 明治 7 年 2 月 21 日生
 長女 不 詳
 同 12 年 6 月 13 日生
 次男 不 詳
 同 15 年 3 月 16 日生

同県同区浅野町 126 番地

士族 水 野 銀 治 (31 才)
 安政元年 9 月 15 日生
 妻 シ カ (26 才)
 安政 5 年 1 月 25 日生
 養子 徳 次 郎
 明治 2 年 1 月 23 日生
 長女 ミ ト リ
 同 12 年 1 月 27 日生
 二女 坂 栄
 同 16 年 4 月 7 日生

同県同区长土堀 1 番町 18 番地

士族	野 崎 則 直	(47 才)
	天保 9 年 4 月 11 日生	
父隠居	則 敏	(75 才)
	文化 7 年 10 月 25 日生	
継母	逸	(58 才)
	文政 10 年 11 月 8 日生	
妻	多 賀	(37 才)
	嘉永 2 年 2 月 19 日生	
長男	則 裕	
	明治 5 年 7 月 4 日生	
長女	岩	(18 才)
	慶応 2 年 10 月 25 日生	
二女	知	
	明治 3 年 8 月 28 日生	
三女	殊 城	
	同 8 年 2 月 7 日生	
四女	齋	
	同 10 年 8 月 26 日生	

あとがき

北海道の起業社、前田村を調べるきっかけは、「図説 石川県の歴史」で、「北海道.前田村」に士族授産事業で移住者がいたことを知ったことからである。

北海道へは最初は 2000 年、次は 2005 年からほぼ毎年訪れていたが、ついに念願の前田神社を訪れることが出来、旧加賀藩士の足跡を調べるきっかけになったことです。

近世資料館では江戸時代までの資料で、明治以降の資料は玉川図書館で調べて欲しい。前田家の資料に関しては、成巽閣か前田育徳会にあると思うとのことでした。

玉川図書館では各種関連図書を閲覧したがそれらしきは不明でその年は終わった。

今年に入り、前田地区から名簿の調査依頼があり、成巽閣に協力をお願いした。

成巽閣の吉竹泰雄館長さんからは起業社に関する資料は前田育徳会にある、また、近世資料館や歴博にも問合せいただき、貴重な情報を頂きました。

石川県立歴史博物館の本康宏史学芸課長さんには、起業社に関する各種図書や研究資料を閲覧させて頂き、県立図書館にも同様な資料があることを教えていただきました。

石川県立図書館では、資料を調査して頂き、原田英二氏の著書をコピーすることができました。

金沢市議会議員の中西利雄氏には、前田地区を訪問した者同士として、相談に乗っていただき且つ、金沢市史・新共和町町史の中で入植者名簿一覧についての考察も行っていたいただき、「新共和町史」のコピーの提供をしていただきました。

また、金沢市史の編纂に携わった新本欽悟氏には電話にて、編纂当時の事や着眼点をご指導いただきました。

各図書の起業社、前田村の項目を時系列に並べなおして見ることで、起業社の盛衰や人々の関連も見えてきたものもありました。

各図書を引用した箇所も多く、また、これで全てを網羅できたものでもありません。

また、前田神社由緒記や各図書に於いて起業社の入植戸数は 79 戸となっていますが、実際は明治 20 年 12 月の戸口調査で 62 戸 297 人となっており合致していません。

当時は多くの移住者が渡道しており、行政上の書類の引継ぎにも問題はありそうですが、私の今後の課題と受け止め更に調べていきたいと思っています。

今回、資料作成にご協力頂いた方々に感謝申し上げます。

参考文献

- 「金沢市史・通史編 3」、「金沢市史・資料編 12」
- 「新共和町史」、「起業社の人々（原田英二）」
- 「図説 石川県の歴史」

平成 24 年 3 月
花 木 幹 史